

# 明治期における漢語系接尾辞の競合関係に関する一考察

## －「-的」と「-上・-風・-性」の比較を中心に－

金 瞠 泳\*

### <目 次>

- |              |                              |
|--------------|------------------------------|
| 1. はじめに      | 4. 「-的」と漢語系接尾辞における<br>変遷と関連性 |
| 2. 先行研究と問題提起 | 5. おわりに                      |
| 3. 資料調査      |                              |

Key Words: 的, 上, 風, 性, 漢語, 接尾辞, 漢語系接尾辞

### 1. はじめに

近世末から明治期までには新しい漢語が多く使われるようになった時期であるが、漢語系接尾辞も例外ではない。「-的・上・風・性」など、多くの漢語系接尾辞の使用が拡大したが、その中でも「-的」の使用拡大が一際目立つようになった。「-的」は近世期の中国俗語文学における翻訳・訓読によって導入され、明治期に西洋文献の翻訳語に多く使われて広まった語であるが(金 瞠泳(2011・2012a), 大槻文彦の『復軒雜纂』)によると、「-的」は白話小説の

\* 高麗大学、翻訳人文学研究院・言語情報研究所、研究教授、日本語学

1) 今の文に、「反抗的態度」などは、「反抗様態度」などいふやうな意に用ひて居る。「軍事的設備」は「軍事上設備」、「獨勉的教育」は「独勉風教育」、「學者的口氣」は「学者然たる口氣」といふやうに用ひて居る。的の字を、かやうに用ゐるは、支那の官話小説に、常の事であるけれども、此の的に、「様」、「上」、「風」、「然」などいふ意は決して無い。……

『復軒雜纂』大槻文彦(1902:240)

影響によって「様」「上」「風」「然」のような意で用いられたという言及がある。一方、李(2006)<sup>2)</sup>によると、「-的」は翻訳されるに際して「-様」「-上」「-風」「-然」などの語と競合しながら定着したとも言われている。しかし、翻訳では、原語の同一語(e.g.英語)を文脈によって複数の語に訳したり、意訳したりすることは当然であって、それだけで「-的」と「-様」「-上」「-風」「-然」など、一連の漢語系接尾辞(以下、漢語系接尾辞)が必ずしも競合関係にあるとは断言できない。しかし、今回の調査によると、以下の(1)のように、近代における翻訳に際して新しく漢語系接尾辞が使われるようになった上、翻訳語にはバリエーション(「-上」か「-的」)まで存在していたことが確認できる。つまり「-的」とその他の一連の漢語系接尾辞は、実際に競合関係のような何らかの関係にあったことが窺える(mechanicalの訳、(1)a-2と(1)b-2参照)。

- (1) a. Vaucanson: his mechanical genius, improvements in silk … *Self-Help*  
 1) 対応文無し。 『西国立志編』  
 2) … 其機械上の天才、其絹布製造の改良 …『自助論』2頁11行
  
  - b. … behind him a character for probity, virtue, manliness, and mechanical genius, of which his descendants may well be proud … *Self-Help*  
 1) 対応文無し。 『西国立志編』  
 2) … 高徳と勇敢と器械的天才とを有する一人格なり …『自助論』88頁5行
  
  - c. The use of early labour in self-imposed mechanical employments …  
 1) … 工事ヲ作スハ … 『西国立志編』554頁2行  
 2) … 自己の好む器械的業務に … 『自助論』512頁13行
- 凡例) 順番に*Self-Help*(明治2年・1869)、『西国立志編』明治10年(1877)、『自助論』明治39年(1906)

そこで本稿では、先行研究の明治期における「-的」の用法、意味と機能の変遷に関する考察を踏まえて、「-的」とその競合関係にあったといわれる漢

---

2) 明治十二年頃の翻訳書における「的」の用法はまだ他の語との競合関係にあり、明治時代の書き言葉の文体における「的」の位置はまだ確定したものではないこと。(e.g. Substantive Abridged Sentence → 實名詞様簡約文章 / Mathematical Geography → 算數上地理学) 李(2006: 88)

語系接尾辞を比較して、どのような関係であったかを明らかにしたい。

## 2. 先行研究と問題提起

前述したように、大槻文彦の『復軒雜纂』には、「ー的」が中国の俗語小説とは異なって、日本語では「様」「上」「風」「然」などの意味で使われていたという言及がある。本稿では、このような記述を手がかりとして、発生期における「ー的」と一連の漢語系接尾辞との関連性に関する先行研究を検討してから論を進めたい。まず、李(2006)は明治期における『官刻六諭衍義』、『新橋雜記』初・二編、『和氏授業法』の四つの文献<sup>3)</sup>における「ー的」の用法を紹介し、とりわけ『和氏授業法』における「ー的」の用例に注目し、訳語「ー的」が「ー様」「ー上」などと競合関係にあったと述べた。

- (2a) [様] 實名詞樣簡單文書 Substantive Abridged Sentence ·  
形容詞樣簡約文章 Adjective Abridged Sentence ·  
分詞樣簡約文章 Participial Abridged Sentence ·  
不定法樣簡約文章 Infinitive abridged Sentence ·  
獨立樣簡約文章 Absolute Abridged Sentence (190p)  
cf. 形容詞的 Adjective · 實名詞的 Objective(170p), 形容詞的元素 Adjective Element(175p)
- b. [上] 論理的報告上の首領文章 the leading logical declarative sentence (183p), 読書上ノ知識 book knowledge ト實事上ノ知識 Real knowledge (221p)  
cf. 報告的 a simple declarative subordinate sentence (182p)
- c. [性] 必要性 essential · 愚在性 accidental (269p) 李(2006: 84-87)  
凡例1) 波線と一部の下線、また一部例文の順番は稿者による。  
2) ページ番号は『和氏授業法』基準。

李(2006)は(2)のような用例をあげて、1)「ー様」と「ー的」の競合は「ー的」の名詞的用法を除く連体修飾の場合に限られている、2)「ー上」と「ー的」は同じく漢語固有の造語力の限界を補うものとして用いられている、3) 最後に「ー性

3) 順に、享保6年(1721)・明治11年(1878)8月・同年11月・明治10年(1879)。

」の場合、後に「ー的」によって言い換えられるようになる結果、「ー性」が名詞の用法に孤立してしまったと述べた。

ここで、このような関係が本当に競合だと言えるかといった疑問や、その用語及び定義は措いたとしても、「ー的」と一連の漢語系接尾辞の間には何らかの使い分けがあったことはまず確かである。しかし、金(2012b)で述べられたように、「ー的」は中国俗語文学や西洋文献の翻訳などの影響を受けながら、徐々に形容動詞のような用法に近づいた語である。従って、明治期における「ー的」の用法を考察するに際しては、そのような通時的な変遷過程を念頭において考察を行わなければならない。

そこで本稿では、「ー上・ー風・ー性」のような漢語系接尾辞が「ー的」の影響を受けたという仮説の下で、「ー的」と他の漢語系接尾辞における影響関係を、通時的な変遷課程を視野に入れて考察を行うこととする。詳しくは、「ー的」の用法が現代日本語に近づいていく明治30年代を基準とし<sup>4)</sup>、その前後の複数の文献における「ー的」と他の漢語系接尾辞の用法とその意味を比較したい。

### 3. 調査資料

本稿では、金鳴泳(2012a)の調査資料を基本として、とりわけ「ー的」を多く使った一部の翻訳書をその原著(英文テキスト)と比較して調査を行った。その調査資料は以下の(3)のようである。

- (3) a. 明治期における合計162件(翻訳書73件・非翻訳書89件)のテキスト  
 ※ 詳しい目録は、<参考文献・調査資料>及び金(2012a)参照。

---

4) 明治期における「ー的」の用法は、①・②期(明治19年まで)には「ー的+ノ」用法が連体用法の多数を占めている。しかし、いわゆる「現代的な用法」である語幹連体・ナ連体用法が徐々に増加し、③期(明治20~29年)になると、その数値が逆転する。さらに④期(明治30~39年)になると、「ー的」の「ー的+ナル+被修飾語」の形式の連体用法は「ー的+ナ+被修飾語」の形式の連体用法に逆転される(金鳴泳(2012a: 270-276参照))。

凡例) ①, ②などの数字は明治期を約10年単位で分けた任意の時期区分で、理解のために丸数字の年度を括弧内に表記した。

## b. 1) 明治30年以前

- 『西洋開拓新説』明治3年(1870), 『西洋家作雑形』明治5年(1872), 『航海夜話』明治5年(1872), 『大森介墟古物編』明治12年(1879), 『動物進化論』明治16年(1883), 『百工開源』明治19年(1883) 凡例) 以上, 『明治文化全集』26巻。
- 『春風情話』明治13年(1880)『開巻悲憤 / 慨世士伝』明治18年(1885), 『雷小僧』明治25年(1889), 『扇子使用法の練習』明治26年(1890), 『ジョセフ・アーディソンの散文』明治28年(1892) 凡例) 以上, 『明治翻訳文学全集』4巻。

## 2) 明治30年以後:『自助論』明治39年(1906), 『何も言へぬ』明治42年(1909), 『二十世紀』明治44年(1911)

凡例) 本稿に直接取り上げる(3)のテキストに対応する英文テキストのリストは省略する。

#### 4. 「-的」と漢語系接尾辞における変遷と関連性

本節では明治期における「-的」と他の漢語系接尾辞の用法の変遷に関する考察を行い、両者の関連性を明らかにする。しかしその前に、明治期における「-的」の用法の変化に簡単に触れてから論を進めたいと思う。

##### 4.1 「-的」の擬似形容動詞化

明治期における「-的」の連体用法には、形式上、主に三つの用法(ノ・語幹・ナ)があるが、実際にはその意味が非状態性か状態性かによって大きく二つの用法(ノ・ナ)に分けることができる。まず、ノ連体用法とナ連体用法は、以下の(4)のように、非状態性を表すか状態性を表すかによって区別できる。

- (4) a. 感情的の興味 = 感情における興味  
     ⇒ 感情ノ興味, \*感情的ナ興味, \*かなり感情的ノ興味 : 非状態性
- b. 感情的なるハンエー = 感情的ナハンエー  
     ⇒ \*感情的ノハンエー, 感情的ナハンエー, かなり感情的ナハンエー : 状態性

金鳴泳(2010b: 101p)の(17)・金鳴泳(2010a: 272p)参照

続いて、語幹連体用法の意味を簡単にまとめると、以下の(5)のようになる。

- (5) a. 感情的<sub>ナ</sub>欲望 = 感情における欲望(意味)  
   ⇒ 感情ノ欲望 感情的ノ欲望 \*感情的ナ欲望  
   ⇒ \*かなり感情的欲望 : 非状態性  
   (意味：「感情的ノ欲望」の解釈が「感情的ナ欲望」より妥当)
- b. 感情的<sub>ナ</sub>議論 = 感情に偏って議論(意味)  
   ⇒ \*感情ノ議論 \*感情的ノ議論 感情的ナ議論  
   ⇒ かなり感情的議論 : 状態性  
   (意味：「感情的ノ議論」より「感情的ナ議論」の解釈が妥当)

金曉泳(2010b: 101p)の注18参照

金曉泳(2010b)で述べたように、明治期におけるナ連体用法はノ連体用法とは異なって、程度副詞と共にできる“状態性(相対形容)”である場合のみ使われた。よって、当時のナ連体用法は、現代日本語の意味範囲より狭く、他の連体用法(ノ・語幹)の意味範囲の方が広かったと考えられる。一方、明治期における「-的」の用法には、ノ連体用法の減少と語幹・ナ連体用法の増加という変遷が見られる(注4参照)。

つまりこれは、1)およそ明治30年代から、古くからのノ連体用法と語幹連体用法だけでは、(6)のような意味を翻訳するには不十分であった。2)従つて、このように“状態性”的意味を表すために、一般形容動詞のような形式(○○+ナ+被修飾語)を借りた、ナ連体用法(○○的+ナ+被修飾語)を使うようになったことを意味する。言いかえると「-的」における連体用法の変化(「ナ」連体用法の発生など)によって、「-的」が形容動詞のように扱われるようになることが、明治30年代を前後にして行われたことを意味する。

- (6) … the barber's shop came Jeremy Taylor, the most poetical of divines …  
   ⇒ … 理髪師の店より出でしものにして、最も詩的な神学者たる …  
   Self-Help (1869)7頁24行, 『自助論』明治39年(1906)11頁

一方、『復軒雑纂』の記述のように(「軍事的設備」は「軍事上設備」など、脚注1参照)、明治期初期には「-的」のような意味を果たした漢語系接尾辞が多数存在していたが、その中で曖昧で広い意味領域からなる多義性を持つ語(藤居信雄1957: 72)である「-的」が新たに使われるようになったと考えられる。

- (7) a. 又近代ノモノニ至テハ其左右前後ノ差度甚シカラズ、因テ講學上其上古ノ者ニ新名ヲ付シテ側脣脛骨ト稱ス。『西洋開拓新説』明治3年(1870)269頁・2行  
 b. … そハいど珍奇なる一種の網細工風に編みわはせたる飾紐、笠縁、刺繡などをもて充たされたり、是れはたその細部ハ肉眼にハ見えがたかりき。  
     『ジョセフ、アディソンの散文』明治28年(1895)44頁・14行  
 c. … 成長シテ入種ノ野蠻人ト一般性猛惡ヲ帶ビ、好ミテ蟲鳥類卑下ノ動物ヲ殺害シ。『動物進化論』明治16年(1883)358頁10行  
 d. … 毒薬ヲ装スル時ハ其創傷最モ小ナルモ、毒業ノ効力ニ由テ速然ノ死ヲ致スペシ。『百工開源』明治19年(1886)367頁1行

実際の明治期における一連のその他漢語系接尾辞の用例を見てみると、上記の(7)のようであるが、稿者はこのような漢語系接尾辞は、明治期に急速に増加しながら用法が変化した「-的」の影響を受けたと判断する。

#### 4.2 「-的」と漢語系接尾辞

本節では前節における仮説の検証として、資料(3)bにおける「-的」と他の漢語系接尾辞の用法を、「-的」の用法における主な変化が起こった明治30年代を基準にし、その前後の様子を実際の統計をもって考察する。



図1. 明治期における「-的」の新・旧連体用法の変遷(%)—金(2012b:271)

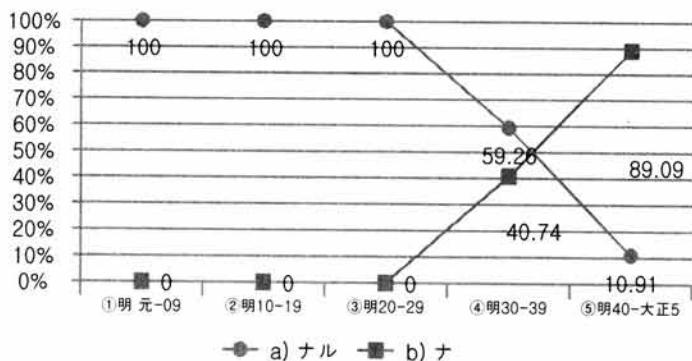


図2. ⑦における「-的+ナル」と「-的+ナ」の形式変遷(延べ語数・%)—金(2012b:275)

まず、以上の図1と図2における「-的」の連体用法の変遷を見ると、「-的」は明治20年代に入ってから急激にノ連体用法が衰退し始め、やがて30年代になってからはナ・語幹連体用法に抑えられ、その主な連体用法としての地位を失うようになったことが確認できる。また、さらに時代がくだって明治40年代になると、ノ連体の代わりに主な連体用法の一つになったナ連体用法は、現代日本語の“形容動詞”的な用法のように、「-的+ナル+被修飾語」の形式が衰退し、「-的+ナ+被修飾語」の形式がその主な用法になる(詳しくは、金瑞泳(2010b・2012b))。

表1. ①期・30年代以前の「-上」「-風」「-性」「-然」「-様」(延べ語数・%)

時代	的 活 用	装 定								述 定			名詞	その他	計			
		連用用法				連体用法				計	語幹	その他						
		②二	①語幹	その他の	計	④ナ (ル)	⑤ノ	③語幹	⑥その他									
上		9	2	0	11	0	7	3	0	10	21	0	0	0	0	21		
	%	43	10	0	52	0	33	14	0	48	100	0	0	0	0	100		
風		2	0	0	2	1	1	0	0	2	4	0	1	1	1	6		
	%	33	0	0	33	17	17	0	0	33	67	0	17	17	17	100		
性		0	0	0	0	0	3	1	0	4	4	0	0	0	5	9		
	%	0	0	0	0	0	33	11	0	44	44	0	0	0	56	100		
然		0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1		
	%	0	0	0	0	0	100	0	0	100	100	0	0	0	0	100		
様		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
計		12	2	0	14	1	11	4	0	16	30	0	1	1	6	37		
	%	32	5	0	38	3	30	11	0	43	81	0	3	3	16	100		

表2. ②期・30年代以後の「-上」「-風」「-性」「-然」「-様」(延べ語数・%)

上	6	13	0	19	0	45	4	0	49	68	0	2	2	1	71	
	%	8	18	0	27	0	63	6	0	69	96	0	3	3	1	100
風		0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	2
	%	0	0	0	0	0	50	0	0	50	50	0	0	0	50	100
性		0	4	0	4	0	0	0	0	0	4	0	0	0	15	19
	%	0	21	0	21	0	0	0	0	21	0	0	0	79	100	
然		0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2
	%	0	0	50	50	0	0	0	0	0	50	0	0	0	50	100
様		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計		6	17	1	24	0	46	4	0	50	74	0	2	2	18	94
	%	6	18	1	26	0	49	4	0	53	79	0	2	2	19	100

凡例 1) ①期における「-的」の用例の少なさを勘案して、①(30年代前)対②(30年代以後)のテキスト量の比率を、1.6:1にした。2) 今回の調査によると、管見のかぎり「-様」の用例は見当たらなかった。3) 表1・2における太線の部分は、30年代を前後にして主な変化を見せた用法。

一方、明治30年代を基準として分類した漢語系接尾辞「-上」「-風」「-性」「-然」「-様」の統計資料は、表1と表2のようである。両表における30年代以前(以後、Ⓐ期)と30年代以後(以後、Ⓑ期)の漢語系接尾辞用法を比較してみると、まずそれぞれの用法が特定の用法へ集中する傾向と連体用法が全般的に衰退する傾向などが確認できる。その主な変遷を簡単にまとめると以下の(8)のようである。

(8) a [「-上」のノ連体用法への移行及び使用量の増加]

: Ⓐ期には「-上」の主な用法として、ニ・語幹連用とノ連体用法がそれぞれ43・10・33%を占めているが、Ⓑ期になるとそれぞれ8・18・63%になり、全般的にノ連体用法に傾く。また、それに伴って「-上」の使用量の増加が目立つ。

b [「-風」のノ連体用法への移行及び使用量減少]

: 「-風」の場合、Ⓐ期にはニ連用・ナ・ノ連体用法、述定・助動詞用法、その他の用法など、その用法が幅広く分布していたが、Ⓑ期になるとノ連体・その他の用法だけを残して他の用法は見当たらなくなる。しかし、「-上」とは対照的に全般的な使用量は減少する。

c [「-性」のその他・名詞用法の増加、つまり体言化接尾辞への限定化]

: 「-性」の場合、ノ・語幹連体用法、その他の用法がそれぞれ33・11・56%を占めていたが、Ⓑ期になると、0・0・79%になり、その他の用法の中で名詞用法に多く傾くことになる。

d [「-的」以外の漢語系接尾辞における連体用法の全般的な減少]

: Ⓑ期になると、「-上」のノ・語幹連体と「-風」のノ連体用法を除いて、裝定・連体用法における漢語系接尾辞が一件も見当たらなくなり、一連の漢語系接尾辞の連体用法の減少が目立つ。

このような明治30年代を前後にした「-的」とその他の漢語系接尾辞の用法の変遷を合わせて考えると、両方の用法における変化推移は単なる偶然ではなく、何らかの影響関係にあったとも考えられる。従ってこれからは、「-的」とその他の漢語系接尾辞をそれぞれ比較することによって、両者の関係を明らかにする。

#### 4.2.1 「-的」VS「-上」

まず、「-的」と「-上」に関する考察であるが、(8)aと図3を見ると、Ⓐ期に

は「-的」と「-上」共にノ連体用法がそれぞれの連体用法の主な用法であつて、(9)のように競合或いは共存していることが確認できる。

- (9) a. … とハ化學的實驗を行ふべし …

『ジョセフ・アデソンの散文』明治28年(1895)293頁

- b. … 其比例ヲ定ムルニカヲ用ヒ、 ジュエット氏ガ化學上ノ分拆ニ心ヲ竭セル共ニ感荷スル所ナリ。 『大森介墟古物編』明治26年(1893)256頁14行

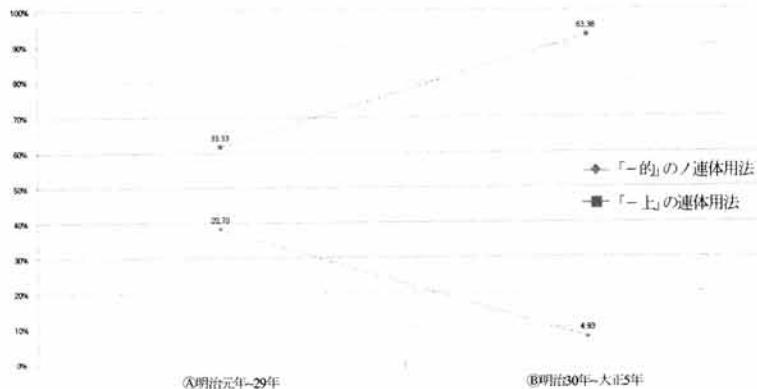


図3. 明治期における「-的」と「-上」のノ連体用法の変遷の推移(延べ語数・%)  
凡例) データはそれぞれの全用法におけるノ連体用法の比率(%)

しかし、(B)期になると「-的」の主な連体用法がノ連体からナ連体へ移行していく反面、「-上」は全体的に使用量が成長する中でノ連体用法が多く増加する(21例: 71例)。それは図3における両方の推移を見ればより明らかであるが、明治30年代を基準に「-的」と「-上」におけるノ連体用法の比率は反比例していることを確認できる。つまり、「-的」の擬似形容動詞化(主な連体用法がナ連体用法になり、まるで形容動詞のように認識されるようになる)は結果的に明治期における「-的」と「-上」連体用法の関係を“競合”から“相補”へ移行させたと考えられるのである。

それでは、このような両語の関係変化の根本的な原因はどこにあるのだろうか。稿者は主な原因是両者の意味と連体用法の形式における“類似性”と明治期における「-的」の“品詞性”的変化にあると考える。

まず、用例(1)と(9)のように、「-的」と「-上」は、実際に明治期において同一テキスト内の同一語(e.g. mechanical)を「-的」と「-上」、両方を共に使用して翻訳している場合が多く、以下の(10)のように稿者任意で両語を置換しても文脈における差支えはさほどない(両語における細かいニュアンスの差は考慮しない)。さらに、その主な連体用法が共にノ連体用法であった。このような両語における意味と用法における“類似性”が「-的」と「-上」の競合関係を成立させたと考えられる。

なぜならば、後に「-的」が主に状態性を表す“形容動詞”のような品詞カテゴリーとして認識されるようになることによって、すわりが悪くなった「-的」のノ連体用法の役割を、意味において“類似性”を持つ「-上」が自然に担うようになつたと考えられるからである。

(10) a. … 其機械上の天才、其綱布製造の改良 …

→ … 其機械的の天才、其綱布製造の改良 …

『自助論』明治39年(1906)2頁11行

b. … 高徳と勇敢と器械的の天才とを有する一人格なり …

→ … 高徳と勇敢と器械上天才とを有する一人格なり …

『自助論』明治39年(1906)88頁5行

一方、「-的」のノ連体用法は、主にその語幹連体用法によって肩代わりされたが(金曉泳2012b)、「-上」は⑧期になると、以下の(11)のように、主に英語の「upon・in・on」など、「場所・分野・～における」といった方角の概念を伴う抽象的な意味の翻訳語として使われる場合に多くみられる。言い変えると、「-上」は「-的」がカバーし切れない意味・役割を担っていくことが分かる。つまり、「-的」の語幹連体用法とも差別化できる意味(方角の概念)を持っていたために、「-上」は一部の「-的」のノ連体用法を代替できたと判断するのである。

(11) a. … 意念自由なりとの實際上の確信の上に進むものなり。

『自助論』明治39年(1906)364 頁7行

: proceed upon the practical conviction that the will is free. *Self-Help*(1869)

b. 彼は眼を印度ト注ぎ、施政上の一地位を得んと計りしも …

: Having turned his views to India, he sought employment in the civil service,

but failed.

*Self-Help(1869)*

また、(12)の用例を見てみると、「-的」と「-上」が訳者によって意図的に使い分けられたと考えられる。つまり、(11)(12)のように、“程度副詞”と共に起できない“非状態性(絶対形容)”の場合は「-上」の連体用法が使われ、“状態性(相対形容)”の場合は「-的」の連体用法が使われたことが確認できる。

- (12) a. 如何なる論理的結論をなすにもせよ 『自助論』明治39年(1906)363頁13行  
     : Whatever theoretical conclusions logicians may have formed as to the freedom  
     of the will, each individual … *Self-Help(1869)*227頁4行  
     ⇒ かなり論理的結論：“状態性(相対形容)”
- b. 譯者註 意志自由なるか然らざるかの問題は、哲學上論理學上煩瑣なる議論… 『自助論』明治39年(1906)363頁13行  
     ⇒ \*かなり哲學上論理學上煩瑣なる議論：“非状態性(絶対形容)”
- c. 宗教上及び政治上の意見は道徳的品性の具體的形式なり … 『自助論』明治39年(1906)530頁12行  
     : without reference to moral character—and religious and political opinions are  
     the concrete form of moral character— *Self-Help(1869)*  
     ⇒ \*かなり宗教上及び政治上の意見：“非状態性(絶対形容)”  
     ⇒ かなり道徳的品性の具體的形式：“状態性(相対形容)”
- 凡例) (12)bは (12)aの訳者註として追加された文であって、対訳文がない。

#### 4.2.2 「-的」VS「-風」

さらに、図4のように、明治期における30年を基準とした「-的」と「-風」のナ連体用法と「-風」用法の使用量における変化推移をみてみると、「-風」への「-的」の影響が窺える。

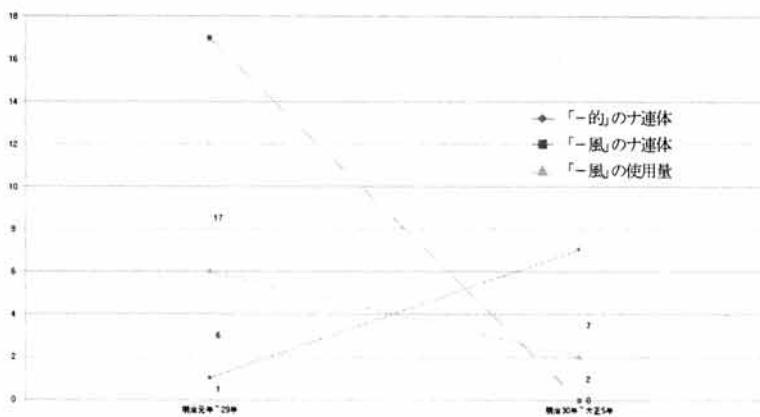


図4. 明治期「-的」・「-風」の「ナ」連体用法(延べ語数・%)と「-風」の使用量推移

図4をみると、「-的」の場合、Ⓐ期にほとんど見られなかった「-的」のナ連体用法が、Ⓑ期になって増加している。しかし、「-風」の場合はそれと逆にⒷ期になると「ナ」連体用法が一切見れなくなる。また、漢語系接尾辞「-風」の用法自体が減少する。つまり、「-風」も、(13)のように、Ⓐ期には「-的」と類似した意味で使われたが、Ⓑ期になってから「-的」の用法における変遷に伴って、(14)aのようなその他・名詞用法や(14)bのようなノ連体用法しか見られないようになるなど、「-的」と競合関係であったが、後に相補関係に移行していたと考えられる。

もちろんこの点に関しては、明治期における「-風」の用例をより幅広く調査し、現代日本語における「-風」の用例まで押さえるなど、さらなる考察が必要とされると思われるが、それに関しては今後の課題としている。

- (13) a. 但し此造法は、英國に於て、古風なる小家及び農家に用ゆる簡略なる仕來なり… 『西洋家作雛形(ひながた)』明治5年(1872)101頁・7行

b. 此戸錠は、包隠して内景の見えざる尋常の戸錠に勝れり、又窓には昇降する所の障子を備へて、フランス風の障子(蝶番の付きて通例の戸の如く押して開閉する障子を云)を用ゆべからず。…『西洋家作雛形(ひながた)』明治5年(1872)101頁・7行

c. …珍奇なる一種の網細工風に編みわはせたる飾紐、筈縁、刺繡などをもて

充たされたり、是れはたその細部ハ肉眼にハ見えがたかりき。

『ジョセフ、アデソンの散文』明治28年(1895)44頁・14行

- (14) a. … 而して余は前者を取り、是れかゝる翻譯風が最も能く且つ最も忠實に原著者の精神を傳へ得べしと思ひたればなり。

『自助論』明治39年(1906)1頁8行

- b. … かゝる翻譯風の當然なる結果として、余の譯文の思想發表法は、日本文の思想發表法と異なる所あるべく、… 『自助論』明治39年(1906)1頁10行

#### 4.2.3 「-的」VS「-性」

続いて「-性」に関する考察であるが、(8)cで述べたように「-性」も「-上」と同じく、⑧期になって量的な成長をみせる中で、その中心的な用法が(15)のようなその他・名詞用法になる。

- (15) a. 然らば、子長するや、若し好資性を有するものならば、……

『自助論』明治39年(1906)579頁8行

: carefully train his habits of application and perseverance; and as he grows older, if the right stuff be in him, he will be enabled vigorously and effectively to cultivate himself. *Self-Help*(1869)

- b. クランドン夫人こそは立派な個人性と趣味とをもつて、今は世間から忘れられているが、此人の娘時代には ……『二十世紀』明治44年(1911)15頁12行

: …… Clandon had sufficient individuality and good taste to stand out resolutely against the now forgotten chignon in her girlhood.

*Plays Pleasant : You never can tell.* 明治31年(1898)

一方「-的」の場合、④期には(16)のようにその他・名詞用法が多く見られ、その中でも(16)cのような、「飛散性」にさらに「的」をつけた「飛散的性」のような用例まで見られる。

- (16) a. … 身ニ敝納衣ヲ纏ヒ、跣足ニシテ疾歩シ、猛土的モ又手ニ白刃ヲ提ゲ來テ

… 『泰西活劇春窓綺話』明治17年(1884)『明治文化全集』15巻63行

- b. 我レ這ノ老耄的ヲ縛シテ動ク能ハザラシメン「歐洲奇事花柳春話」明治11年(1878)『明治文化全集』15巻490頁

- c. 他ノ飛散的性ヲ化生スヘキ酸類ハ皆其發生ノ氣ヲ視テ先ツ其何者ナルカラ  
發シ得ヘキナリ … 熊沢善庵『化学分析表』明治12年(1879)

- d. 是れ神權を以て其國の主權となす所のものの主論なり、然るに民權的を以

てその國の主權となす所のものは、各人の意志なり、…

「外交政略」『太陽』明治28年(1895)7

しかし、⑧期の「-的」のその他の用法(17)は、(16)のような名詞用法とはその性格が異なる用法がほとんどであって、純粹なその他・名詞用法だと言い難い。

- (17) a. … ロマンチズムを一家に譬ふれば、「自然的」、「情緒的」以下五六の兄弟が同じ屋の下に同居してゐた。然るに此等の兄弟中「自然的」と名のつくものと他の兄弟等とは性來が違ふ……

島村抱月(1908)「文芸上の自然主義」『近代評論集』274頁

- b. … 其の結論としては、作の態度方法の上に純客觀的と主觀括入的との二項目を得、作の目的題材の上に自然の眞といふこと、之れを碎いては社會問題、科學、現實等に現はれた眞といふことの一項目を得た…

島村抱月(1908)「自然主義の価値」『近代評論集』291頁

- c. … 彼れ等自然主義の一派は、醜陋、鎖末、非理想的、非藝術的、反道德的、肉的、性慾的を面白がりて描寫するにあらず…

長谷川誠也(1908)「現実暴露の悲哀」『近代評論集』243頁

ところが、(15)と(16)における「-的」と「-性」の用法を見ると、前述した「-上」と「-風」とは異なって、両方における意味の“類似性”を見いだし難い。よって、④期における両方の関係は“競合”であったとは考え難く、⑧期においても一方的に「-的」のその他・名詞用法が衰退しただけだと見た方が妥当だと判断する。

## 5. おわりに

本稿では、明治期における漢語系接尾辞が、「-的」の量的变化と擬似形容動詞化によって大きく影響を受けたという仮説のもとで、明治期における「-的」と一連の漢語系接尾辞の用法に関して通時的に考察を行った。その結果、以下のような点が明らかになった。

1) 発生期と思われる④期(明治元年~29年)において、「-的」と「-上」「-風」のような

漢語系接尾辞は、意味における“類似性”によって、“競合関係”であったと考えられる。

- 2) しかし、そのような関係は⑧期(明治30年~大正5年)になってから、繰り返しの回避や修辞法的な側面のみではなく、明治期に大量に輸入された新しい抽象概念や形容詞などの意味に対応するために、互いに足りない部分を埋め合わせる“相補関係”へと変化したと考えられる。
- 3) 以上のような「-的」とその他の漢語系接尾辞の関係における変化の原因是、何より「-的」の使用増加と、擬似形容動詞化、つまり「-的」における“品詞性”的変化にあると考えられる。

つまり、明治期における漢語系接尾辞の中で、「-上」「-風」などの語は、「-的」の用法と意味の変遷の影響を多く受けながら、現在の日本語における用法に定着していったと考えられる。

#### <参考文献・調査資料>

- 浅井真慧・深草耕太郎・坂本充(1997) 「「的を得た」は的を射ているか」第7回ことばのゆれ全国調査から②~『放送研究と調査』47(5), 日本放送協会放送文化研究所, pp52-61
- 畔上道雄(1971) 「内村鑑三と畔上賢造」『思想の科学』119号, 思想の科学社, pp72-87
- 磯邊彌一郎(1906) 「国文に及ぼせる英語の感化」『文章世界』1巻8号, 日本近代文学館, pp5-15
- 遠藤織枝(1984) 「接尾語『的』の意味と用法」『日本語教育』53号, 東京大学国語国文学会, pp125-138
- 大槻文彦著・鈴木広光校注(2002) 『復軒雜纂I—国語学・国語国字問題編』平凡社(大槻文彦(1902) 『復軒雜纂』の復刻版)
- 尾形伊解説(1976) 『小説三言』:『小説奇言』(1753)
- 岡村真寿美(1998) 「『五代史平話』の成立:「講史書」との関係」『中国文学論集』27号, 九州大学中国文学会, pp48-63
- 影山太郎(1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 金嘴泳(2010a) 「「-的」の語基制約」『日本語學研究』第27輯, 韓国日本語学会, pp1-13
- (2010b) 「連体修飾用法に関する一考察——「A的ノB」「A的B」「A的ナB」形式を中心に——」『日語日文学研究』73輯, 韩国日語日文学会,

- pp89-109
- \_\_\_\_\_ (2010c) 「「-的」の連用用法—「比較的」を中心に—』『2010年度台灣日本語文學國際學術研討會—發表論文集—』台灣日本語文學會, 於台灣・淡江大學淡水校園, pp293-300, 2010年12月18日
- \_\_\_\_\_ (2011) 「「-的」の日本語化』『日本語學研究』第30輯, 韓國日本語學會, pp105-126
- \_\_\_\_\_ (2012a) 「「-的」の連用修飾用法—「比較的」の語幹連用用法(「-的+φ+ 被修飾語」形式)を中心に—』『言語情報』14号, 言語情報研究所, pp31-59
- \_\_\_\_\_ (2012b) 「明治期における「-的」の用法の変遷—連体修飾用法を中心に—』『國語語彙史的研究』31, 國語語彙史研究會, 和泉書院, pp261-280
- 朱柏智(1991) 「接尾語「-的」の歴史的研究—明治期を中心に—』『甲南女子大学大学院論叢』13号, 「論叢」の会, pp62-73
- 高橋勝忠(2005) 「「的」論考』『英文学論叢』49号, 1-22, 京都女子大学英文学会
- 陳誼(1999) 「日中両国語における「-的」について』『國語語彙史の研究』18, 國語語彙史研究會, pp329-350
- 長澤規矩也解題(1974) 『唐話辭書類集』第10集:『俗語解』長澤規矩也氏藏本・第三冊(自ソ至テ)
- 中村幸彦編(1985) 『近世白話小説翻訳集』全13巻中, 1巻:『通俗醉菩提全伝』天花藏主人著・碧玉江散人訳, 宝暦9年(1759)・『通俗隋煬帝外史』斎東野人編・贊世子訳, 宝暦10年(1760) / 2巻:『通俗赤繩奇縁』馮夢龍編・贊世子訳, 宝暦11年(1761) / 4巻:『通俗醒世恒言』馮夢龍編・石川雅望訳, 寛政2年(1790)
- 広田栄太郎(1969) 「的という語の発生』『近代訛語考』281-303, 東京堂出版
- 黃冬柏(1996) 「西廂故事の戯曲化について:金・董解元『西廂記諸宮調』を中心として』『中国文学論集』25号, 九州大学中国文学會, pp73-90
- 藤居信雄(1957) 「的という言葉』『言語生活』71号, 筑摩書房, pp71-76
- \_\_\_\_\_ (1961) 「的の意味』『言語生活』119号, 筑摩書房, pp80-83
- 堀口和吉(1992) 「助詞「-的」の受容』『山邊道』 第36号, 天理大学国文学研究室, pp59-76
- 前田勇(1960) 「『てきや』という語』『言語生活』100号, 筑摩書房, pp79-83
- 松井利彦(1987) 「漢語の近世と近代』『日本語學』第6巻・第2号, 明治書院, pp25-36
- 松本萬年(1878) 『新橋雜記』1・2編, 東京:稻田政吉, 大阪府立中之島図書館蔵
- 水野義道(1987) 「漢語系接辞の機能』『日本語學』第6巻・第2号, 明治書院, pp60-69
- 三宅邦(橘園三宅)口授(1817) 『助語審象』卷之下, 菱屋孫兵衛(京都御幸町御池通下ル), 早稻田大学古典籍総合データベース(請求記号:ホ04 00057)

- 山下喜代(1999)「字音接尾辞「的」について」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古希記念論文集刊行会、明治書院 pp24-38
- \_\_\_\_\_ (2000)「漢語系接尾辞の語形成と助詞化ー「的」を中心にして」『日本語学』19卷13号、明治書院 pp52-64
- 山田巖(1961)「発生期における的ということば」『言語生活』120、筑摩書房 pp56-61
- 楊超時(2009)「日本語の「-的」と中国語の“~的”について—通時の観点からの一考察—」『外国語研究』第10号、大東文化大学大学院外国語学研究科、pp129-144
- 吉川幸次郎他(1979~1981)『漢語文典叢書』全6巻中1巻:『訂校・訓譯示蒙』明治14年(1881)
- 李秀卿(1998)「明治・大正期の「-的」の性格 -形容動詞化機能の定着過程-」『文学研究論集』9号、明治大学大学院文学研究科、pp11-29
- 李長波(2006)「近世、近代における「-的」の文体史的考察」『DYNAMIS』10号、京都大学大学院人間・環境研究科、pp68-89
- 廖小梅(1996)「「~的」語形の評価義試論」『専修国文』第58号、専修大学国語国文学会、pp73-89

### 【翻訳テキスト】

- 『明六雑誌 復刻版』1-20号(1998)、大空社
- 『西国立志編 改訂版』(1877)中村正直訳、木平譲
- 『自助論』(1907)畔上賢造訳、内外出版協会
- 『自助論』(1912)小山内薰・中村徳助共譯
- 『明治期翻訳文学書全集・イギリス文学編』中一部(1998)大空社 CD-ROM:「魯敏孫全傳」、「暴夜物語」、「回世美談」
- 『蚕種説』(1869)柳川春三訳、吉田屋:近代デジタルライブラリー
- 『鞋補童教学』(1873)佐橋富三郎訳、近藤四良兵衛等:近代デジタルライブラリー
- 『器械撮説一』1・2巻、『器械撮説二』3巻(1875)大島長四郎訳・桂川甫策閲、一貫堂:近代デジタルライブラリー
- 『仏国革命史・3巻』(1876)河津祐之訳、加納久宣:近代デジタルライブラリー
- 『化学分析表』(1879)熊沢善庵訳、丸屋善七:近代デジタルライブラリー
- 『春風情話』(1878)橋頭三訳(坪内逍遙)、中島精一:近代デジタルライブラリー
- 『政府權限論』(1884)高橋達郎訳・河津祐之閲、岡島支店:近代デジタルライブラリー
- 『開卷悲憤 / 慨世土伝 はしがき』(1885)坪内逍遙訳、晚青堂発児:近代デジタルライブラリー
- 『代数学』(1887)熊沢善庵訳、嵩山堂:近代デジタルライブラリー

『明治翻訳文学全集』全20巻(2003)中一部、大空社

「春風情話」(1880)「開卷悲憤 / 慨世士伝 はしがき」(1885)「婚姻」(1890)「西文小品(旅行の説)」(1891)「西文小品(費の説)」(1891)「雷小僧」(1892)「滑稽氏」(1892)「不思議の後家」(1892)「湖畔妖物」(1892)「夜と朝」(1893)「扇子使用法の練習」(1893)「シーリング銀貨の履歴」(1893)「千人会」(1893)「ジョセフ、アデソンの散文」(1895)「心の解剖」(1897)「四季賦」(1901)「モルモン奇譚」(1901)「夜のけはひ」(1902)「小曲、恋の王座」(1902)「春の潮」(1902)「恋の葬」(1902)「むなしき月日」(1902)「食人会」(1903)「該撒惨殺事件」(1903)「紳士」(1903)「助言」(1903)「無政府党と一夜」(1903)「無音の瀑」(1903)「稀有の裁判」(1903)「人造術」(1903)「名曲「愛禽」」(1903)「庭園の快樂」(1903)「女の眼に映するよなきもの」(1903)「新アラビヤンナイト」(1903)「王女の旅」(1903)「心情」(1905)「何も言へぬ」(1909)「砂時計」(1909)「戯曲 / 馬盗坊」(1910)「二十世紀」(1911)

『明治文化全集』全28巻(1992)中一部、復刻版、日本評論社

「英政如何」(1868)「西洋開拓新説」(1870)「西洋家作雑形」(1872)「航海夜話」(1872)「防雷鍼略説」(1873)「通俗伊蘇普物語」(1873)「開卷驚奇暴夜物語」(1875)「代議政體」(1875)「歐洲奇事花柳春話」(1878)「物理了案」(1879)「大森介墟古物編」(1879)「政治論略」(1881)「主勸論」(1883)「動物進化論」(1883)「人肉質人裁判」(1883)「該撒奇談自由大刀餘波銳鋒」(1884)「泰西活劇春窓綺話」(1884)「仇結奇の赤繩西洋娘筋用」(1886)「百工開源」(1886)「露妙樹利戯曲春情浮世の夢」(1886)「一名西洋歌舞伎種本」(1886)「脳髄生理精神啓微」(1889)「精神病者の書態」(1892)「蘭嶋」(1902)

### 【非翻訳テキスト】

『助語審象』卷之下(1817)三宅邦(橘園三宅)口授、菱屋孫兵衛、早稲田大学古典籍総合データベース

『諸芸袖日記』1-5之巻(1743)八文字自笑・八文字其笑、早稲田大学図書館・古典籍総合データベース

『哲學字彙』(1881)井上哲次郎他、東京大学

『哲学字彙 訳語総索引』(1979)飛田良文編、笠間書院

『洋算用法二篇』(1870)鷺尾卓意(保)著、柳河春三(日敦)閲、大和屋喜兵衛:近代デジタルライブラリー

『化学新論問答』1巻(1875)宇都宮三郎・桂川甫策述、加藤宗吉記、一貫堂:近代デジタルライブラリー

- 『英仏百年戦記』(1876)河津祐之、松栢堂：近代デジタルライブラリー  
『近代文学大系』『近代評論集I』全評論110件(タイトル省略)(1972)  
「青空文庫」<http://www.aozora.gr.jp/>  
『慶応義塾新議』(1869)「學問のすすめ」(1872)「中津留別の書」(1872)「京都學校記」  
(1872)「學者安心論」(1876)「旧藩情」(1877)「教育の目的」(1879)「經世  
の学、また講究すべし」(1882)「德育如何」(1882)「物理学の要用」  
(1882)「學問の独立」(1883)「武藏野」(1887)「新女大学」(1899)「言海・  
ことばのうみのおくがき」(1891)「修身要領」(1900)「瘠我慢の説(1月)  
」(1901)「瘠我慢の説(5月)」(1901)  
『新潮文庫100冊』(1995)新潮社版 CD-ROM  
「たけくらべ」(1895)「高野聖」(1900)「破戒」(1906)「野菊の墓」(1906)「悲しき玩具」  
(1910)「遠野物語」(1910)「こころ」(1914)「高瀬舟」(1916)  
Histoire de la Revolution française depuis 1789 jusqu'en 1814(1838) François-Auguste-  
Marie-Alexis, Bruxelles : Riga, University of Ottawa  
History of the French revolution, from 1789-1814(1856)François-Auguste-Marie-Alexis,  
London: Bohn, University of California Libraries  
Plays Pleasant : You Never Can Tell(1898) George Bernard Shaw, The Project Gutenberg  
Self-Help—With illustrations of Character—(1869) Samuel smiles, Conduct, And  
Perseverance. John Murray

### 【データベース類】

- 『朝日新聞戦前紙面データベース』(2001~2002)東京朝日新聞社, CD-ROM  
『太陽コーパス』雑誌『太陽』(1895-1928)日本語データベース(2005)国立国語研究  
所, 博文官新社, CD-ROM  
『婦人畫報・臨川書店編集部編』(2004~2005)臨川書店編集部, 臨川書店, DVD-ROM  
『婦人公論』(2006) 臨川書店編集部, 臨川書店, DVD-ROM  
『讀賣新聞』(1999~2002)読売新聞社メディア企画局データベース部, CD-ROM  
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』「BCCWJ領域内公開データ(2008年度版のモニ  
ター公開データ)」(2008), 国立国語研究所, DVD-ROM

### 【辞書類】

- 『広辞苑』第6版 新村出編(2008)岩波書店  
『大辞林』第3版 松村明編(2006)三省堂  
『デジタル大辞泉』<http://kotobank.jp/dictionary/daijisen>  
『日本国語大辞典』第2版(2001)日本国語大辞典編集委員会編, 小学館  
『明治期国語辞書大系[普]』1-12巻(1997)：「語彙」「漢英対照いろは辞典」「ことばの

はやし」「和漢雅俗 いろは辞典」「日本辞書 言海」「日本大辞典」「増訂二版 和漢雅俗 いろは辞典」「日本大辞林」「日本新辞書」「帝国大辞典」「日本新辞林」「ことばの泉」  
『プログレッシブ英和中辞典』第4版(2002), 国広哲弥他 小学館

저자명 : 김유영(KIM Yu-Young)  
○|메일 : yuiyu@korea.ac.kr

접수일 : 2012. 05. 10.  
심사개시 : 2012. 05. 29.  
심사완료 : 2012. 06. 24.

<要旨>

明治期における漢語系接尾辞の競合関係に関する一考察  
—「-的」と「-上・-風・-性」の比較を中心に—

金曉泳

「-的」は近世期の中国俗語文学における翻訳・訓読によって導入され、明治期に西洋文献の翻訳語に多く使われて広まつた漢語接尾辞である。拙稿(金曉泳(2010b)「-的」の連体修飾用法に関する一考察—「A的/B」「A的B」「A的ナB」形式を中心に—)(『日語日文學研究』73))では、多く形容動詞と言われている「-的」が他の形容動詞とは異なる「擬似形容動詞」であると述べた。

本稿は、明治期の漢語系接尾辞、「-様」「-上」「-風」「-然」などの変遷が「-的」の量的増加と「擬似形容動詞化」によって大きく影響を受けたという仮説のもとで、明治期の漢語系接尾辞の用法に関して通時的に考察を行つた。

その結果、A期(明治元~30年)には、「-的」とその他の漢語系接尾辞は、繰り返しの回避や修辞法的な用法を含め、「競合関係」にあって共存していたことが分かった。しかしその後、B期(明治30~大正5年)になってからは、もともと装定用法(主に連体用法)の比率が多数を占めていた「-的」は、さらに「擬似形容動詞化」されたことによって、「語幹・ナ」連体用法がより増加し、「ノ」連体用法や名詞のような用法が減少した。一方、「-的」と競合関係にあった各漢語系接尾辞は、「-的」と異なる変遷の道を選ぶことになった。例えば、「-上」は「ノ」連体用法が中心になる。また、「-性」は名詞の「意味機能」がその中心的な用法となる。

つまり、「-的」の使用増加及び「擬似形容動詞化」によって、漢語系接尾辞は明治期に大量に輸入された新しい抽象概念や形容詞などの「意味機能」に対応するために、お互い足りない部分を埋め合わせる「相補関係」へ変化したと考えられる。明治期における漢語系接尾辞「-様」「-上」「-風」「-然」「-性」などの語は、「-的」の用法と意味機能の変遷の影響を多く受けながら、現在の日本語における用法に定着していったのである。